

学 位 論 文 要 旨

氏 名 後藤大輔

題 目 教員養成段階で身につけるべき器械運動の指導力獲得に有効な対面(集合)学習とeラーニングを組み合わせた授業提案に関する研究

学位論文要旨(和文2,000字又は英文1,000語程度)

器械運動は学校体育における体育領域の1つに位置づけられているが(文部科学省, 2008), 学校体育の中では授業時間が少なく, 消極的な取り扱いをされていることが報告されている(浦井, 1994)。長谷川ら(2017)が中学校の保健体育科教員に行った調査では, 学校学習指導要領で器械運動が必修であるにも関わらず, 実施していない学校も散見されたと報告している。器械運動は非日常的かつ複合的な動作が多く, さらに学年が上がるにつれて技が発展していくといった特性を持つ。特に中学校以降は発展技が多く例示されており, 教員は指導を行う際に少なからず困難さを感じると考えられる。このような器械運動の運動特性や特性に起因する指導の難しさが教員の苦手意識へとつながり, 学校教育現場における器械運動の授業を消極的な取り扱いにしているのではないかと考えられる。

さらに器械運動は教員養成段階においても課題を抱えている。胡ら(2011)の先行研究では, 小学校教員志望学生について, 全体の半数以上が器械運動に自信を持っておらず, 教える自信も持っていなかったことが報告されている。また, 小倉ら(2017)が中・高等学校の保健体育科教員を志望する学生に行った調査では, 器械運動領域の自らの実技能力について苦手意識を持つ学生が多く, 技の中には多くの学生が達成できる技とそうでない技があったと報告している。このように, 教員養成段階においても器械運動に対して苦手意識を持つ者が多いことが明らかになっている。

これらの学校教育現場と教員養成段階双方の課題を踏まえ, 本研究では2つの研究課題を設定した。まず学校教育現場における器械運動の指導改善として, 器械運動の指導に関する実態を調査を用いて明らかにすることを目的とし, 研究課題1とした。そして教員養成段階における器械運動の指導改善として, 学習方法や学修形式の改善が器械運動の指導力獲得に及ぼす影響について明らかにするとともに, 対面(集合)学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い, 養成段階における器械運動の指導力獲得に向けた授業提案を行うことを目的とし, 研究課題2とした。

研究課題1について, 岡山県S市内の小学校教員164名を対象に器械運動の指導に関する実態調

査を行い、若手教員、中堅教員、ベテラン教員の職歴区分に分けて分析した。その結果、以下のようにまとめることができた。

マット運動では、開脚前転において、ベテラン教員で適切な指導の知識がない割合が低かった。また、とび前転、倒立前転、伸膝後転、側方倒立回転において、若手教員で適切な指導の知識がない割合が高かった。鉄棒運動では、逆上がり、膝かけ上がり、前方支持回転、後方支持回転、前回り下り、転向前下り、片足踏み越し下り、両膝掛け倒立下りにおいて、若手教員で適切な指導の知識がない割合が高かった。また、前方片膝掛け回転、後方片膝掛け回転において、若手教員で適切な指導の知識をもとに教えることができる割合が低かった。跳び箱運動では、台上前転において、ベテラン教員で適切な指導の知識がない割合が低かった。

以上のことから、小学校体育における器械運動の指導についての実態が明らかとなり、特に若手教員において適切な指導の知識がない技が多くみられることが示唆された。よって、学校教育現場における課題改善に向けた取り組みとして、教員を対象とした器械運動の校内研修会の必要性とともに、教員養成段階における授業を通して、器械運動の指導力を獲得しておくことが重要であると結論づけた。

研究課題2について、まず教員志望学生を対象とした器械運動の授業にて、協同学習・フィードバック学習および体操競技の運動特性を取り入れた授業実践を行い、器械運動の指導に対する自信の変化について検討することで、学習方法や学修形式の改善が器械運動の指導力獲得に及ぼす影響について明らかにした。事前・事後アンケート調査をもとにした探索的因子分析の結果、「器械運動の運動技術と指導技術」因子 ( $p<0.01$ ) と「器械運動の知識と自己・他者理解」因子 ( $p<0.01$ ) の2回目の得点が1回目の得点より有意に高値を示した。以上のことから、指導が難しいとされる器械運動において、学習方法や学修形式を改善していくことで指導に対する自信を高め、指導力獲得につなげていくことができると結論づけた。

次に、教員志望学生を対象とした器械運動の授業にて、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い、対面（集合）学習のみの授業実践（非介入群）と比較することで、器械運動の指導力獲得に関する効果を検討した。その結果、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践において、マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動の技能・知識および指導に対する事後意識について、すべての項目で介入群が非介入群よりも高い傾向であった。また、跳び箱運動では「指導に関する知識」 ( $p<0.01$ ) と「指導内容の立案」 ( $p<0.01$ ) の事後意識について、介入群が非介入群よりも有意に高値を示した。

以上のことから、eラーニングを活用しながら対面（集合）学習を実践することで、従来の対面（集合）学習のみの授業よりも器械運動の技能・知識および指導に対する意識を高めることができ、対面（集合）学習と同等以上の教育効果がある可能性が示唆された。よって、本研究における対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた器械運動の授業実践は、教員養成段階における器械運動の指導力獲得に有効な授業として提案できるものと結論づけた。